美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

1

2019 January/February

TAKE FREE

NO.51

特集

善寶寺、祈りの365日

庄内憧憬

森茂雄

NHK交響楽団特別主幹

Cradle 1

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2019 January/February

平成31年1月1日発行（偶月奇数月発行）第99巻3号（通巻513号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市京田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／月山と白鳥

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

荘内銀行

庄内空港から市内に向かうバスの中で、
私は思わず嗚呼と小さく声を上げた。車窓に広がる風景、
それは小説『月山』にある庄内平野そのままだった。

ぱっぱのおじちゃん

森 茂雄

昨年3月、荘銀タクト鶴岡でのN響公演に立ち会うため、鶴岡を訪れた。庄内空港から市内に向かうバスの中で、私は思わず嗚呼と小さく声を上げた。車窓に広がる風景のせいである。それは小説『月山』にある庄内平野そのままだった。

森敦は私の伯父である。私は伯父を「ぱっぱのおじちゃん」と呼んだ。煙草が好きで「ぱっぱ、ぱっぱ」と吸っては吐き、口から出す煙で輪をこしらえて喜ばせてくれたりしたからだ。そのぱっぱのおじちゃんが、大山に来るように言ってきた。大阪からの夜行列車で一人、鶴岡に向かったのは、小学3年か4年の冬休みのことだった。翌朝、駅のホームには伯父が迎えに立っていた。伯父は妻の暘(よう)と共に大山馬町にあった私の母の実家に身を寄せていた。その年は、珍しく年末になっても雪が降らず、伯父に勤めがあるわけではないので、毎日一緒に出歩いた。その頃は、鶴岡から大山を通って湯野浜までトコトコ走る電車があったが、わずかな電車賃を節約して、善寶寺から歩いて山越えし、湯野浜の温泉に行ったりした。

その日は、大山の西にある高館山を目指した。標高274mのさして高くない山だが、山頂にはテレビ塔や展望台がある。伯父は50歳を過ぎていたが、子どもを子ども扱いしない人で、私とも対等に話した。山道を半分までのぼっただろうか、伯父が眼下に広がる冬ざれた庄内平野の彼方を指し「あれが月山だよ。こちらから見ると、日本海からの厳しい風に削られてゴツゴツして見えるけど、山の向こう側、内陸の方から見ると、まろやかな月のようなのだよ」と教えてくれた。後に見た鳥海山が、日本海に雄大な稜線を曳く独立した山としてその美しさを強く私に印象付けたのに対し、月山は左右に長く臥するような山容に、どこがその頂なのか良くわからないまま、伯父の言ったことだけが記憶の中に放置された。山道をさらに少しのぼったところで、伯父はこんなことを言った。「この前、テレビでのど自慢の番組を見ていたのだよ。何番目かに出てきた男の人の、その歌がなんとも下手くそで、観客は声を立てて笑うのだ。ところがね、審査員をしていた作曲家の古賀政男が真剣な顔で『あなた、僕のところへ来なさい』と言ったのだよ。君は、大勢の素人の観客に褒められるのと、たった一人の古賀政男に認められるのとで、どちらがすごいことだと思うかね」。その問いには答えが含まれている。「それは古賀政男でしょう」。私はませた答えを返してから伯父をうかがった。伯父は、そんな答えなど端から聞くふうもなく、目を遠くにやった。その先にあったのは月山だったのかもしれない。

それから10年、ぱっぱのおじちゃんは、小説『月山』で第70回芥川賞を受賞した。

もり・しげお／公益財団法人NHK交響楽団特別主幹。1954年、森敦の5歳下の弟である父・碩と母・澄の間の長男として東京に生まれる。母方は、善寶寺の五重塔を建てた大山馬町の棟梁・山本佐兵衛の家系。幼い頃から森敦に可愛がられ、大山のほか、尾鷲や弥彦などの放浪先も訪ねた。大学1年の時に、森敦が芥川賞を受賞。1977年、NHK入局。主に報道畑を歩み、政治部記者や「おはよう日本」「ニュース7」の編集などを務める。2011年に N響に移籍。前副理事長。

鶴岡市羽黒地区から望む月山

特集 *Special Edition ZENPOUJI 365days*

善寶寺、祈りの365日

「龍神様」を祀る水の神様として、漁業・海運関係者をはじめ津々浦々の人々のあつい信仰を集めてきた鶴岡市「龍澤山 善寶寺」。「禅」の心を伝える曹洞宗の日本三大ご祈祷寺の1年はご祈祷＝祈り＝と共にあります。2019年己亥、元旦の朝、祈祷太鼓の音と共に、365日の祈りの日々が始まります。

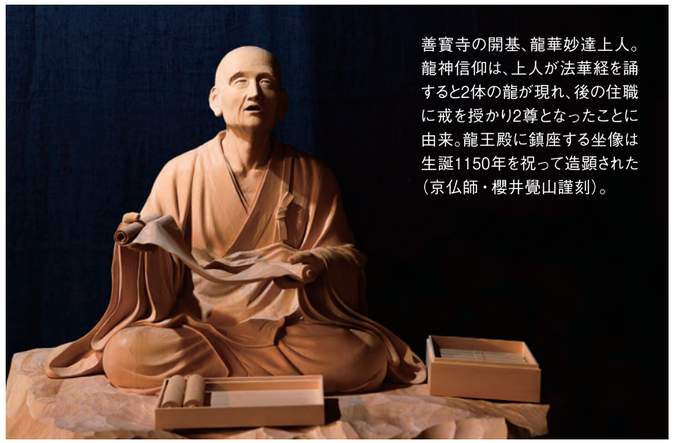
「今は昔、出羽の国に龍華寺と云ふ寺あり。其の寺に妙達和尚と云ふ僧住けり。」
『今昔物語集』の説話にも登場する善寶寺。
2体の龍神伝説に始まり、人々の心に寄り添い歩んできたその信仰の姿をたどります。

善寶寺とその信仰

善寶寺の歴史は平安時代、高僧・妙達上人がこの地に草庵を結んだことに始まります。室町時代に寺号を改め、開山から千有余年。曹洞宗の禅寺として、水の神を祀る善寶寺の「龍神信仰」について、善寶寺42世、五十嵐卓三住職にお話を伺いました。

善寶寺の龍神様を同信とする集い「龍王講」は、北海道、東北、北陸、関東地方と多くの信者を有しています。「龍神様は古代中国に伝わる水を司る生産の神様です。主に海産、漁業を生業とする人々に信仰されてきました。どのようにして広まったのかは定かではありませんが、北前船の往来や、庄内衆が築いた北海道のニシン漁などによって、善寶寺の姿が津々浦々に聞こえていったと考えられます。また、北洋漁業をけん引した加茂の尾形六郎兵衛さんの尽力で、水産業の大手8社の祈願寺となったことも大きく寄与しました。善寶寺は日本の水産の大きな時代の波に乗って発展してきたといえます」。

人々は信仰の対象に偉大なるものを求め、心のよりどころとしてきました。「お経は大地から生まれました。西洋では砂漠という無の中にキリストがすべてを創ったとする創造神話があります。一方で東洋は森林に恵まれ、木々が茂り葉が散りゆく姿に『無常』の思想が芽生え、自然に生まれ成る生成神話ができました。西洋は一神教、日本は八百万の神。日本の神々を守っているのが龍神様。その先人の哲学が、日本中に浸透したと見ています」。



善寶寺の開基、龍華妙達上人。龍神信仰は、上人が法華経を誦すると2体の龍が現れ、後の住職に戒を授かり2尊となったことに由来。龍王殿に鎮座する坐像は生誕1150年を祝って造顕された（京仏師・櫻井覺山謹刻）。

その自然信仰を象徴しているのが、善寶寺に独自に伝わるお経「大雲輪殿龍王安楽経」、龍王経です。インドのナーガ「蛇神」が中国の「龍王」信仰と習合し、日本に伝わって「龍神様」となりました。「雲が慈雨を与え、一天にわかにかき曇る。時にやさしく、時に厳しく雨を降らす雲に、日本の古代人は大きな神『龍』を見たのでしょうね。自然の姿に日本人は学んできた。これが日本人の精神性、誇るべき文化です」。

自然に神が宿るという、日本人の自然観と宗教観。『方丈記』にある「ゆく川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」の一文にも、自然の動態に人が生きる姿を映しています。「私たちはゆく川の流れと同じ、次から次へと移ろっていきます。その動きの中に何かをとらえる、それが『悟り』です。『悟』は、心に吾（われ）と書く、その人のアイデンティティそのものなんです」。五十嵐住職は、悟りを得るために「常に意識を持って進むことが大切」と話します。何をするにも明確な意識を持つことで自らの悟りが開かれ、世界が拓かれる。新しい年、流れる水のように淀まず、清らかに進みたい、そんな祈りを持たずにはいられません。

龍神様が身を隠したとされる貝喰の池のほとりに建つ奥の院「龍神堂」。立春にはこの裏の沢でお水取り式が行われる。

御尊体の北辰妙見大菩薩、両脇に龍王2尊を祀る龍王殿。龍宮城を模したとされ、屋根が海の波を象る。

善寶寺42世五十嵐卓三住職は昭和6年、鶴岡市生まれ。曹洞宗教化研修所研修員などを務め、国内外で曹洞宗の教え、禅の精神を布教。著書に『道元思想の本質』など。

迫力ある太鼓に合わせ、全600巻の大般若経を転じて読む「転読（てんどく）」によるご祈祷が、毎日2時間ごとに行われる。

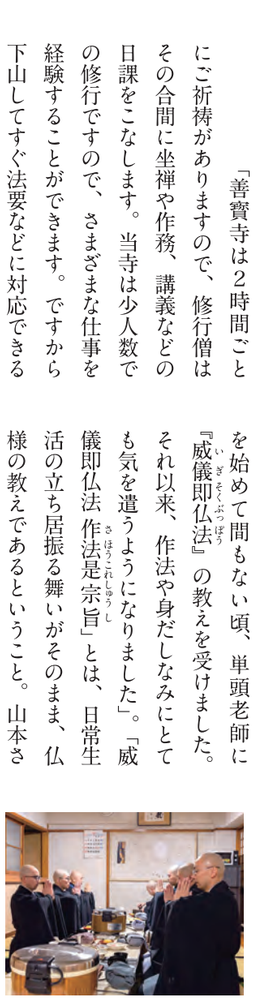
善寶寺は禅宗の寺院として、多くの民衆と神仏とを結ぶ場であり、また、その結び役となる僧侶の行いを磨く場という2つの面を持っています。知られざる修行の場を訪ねました。

日々、祈りの寺

「只管打坐（しかんたざ）」「即心是仏（そくしんぜぶつ）」ただひたすらに坐り、その心で生きていく――。禅の教えは、毎日を過ごす心と姿こそが修行であることを表しています。善寶寺は禅宗の三大祈祷寺院であり、曹洞宗の僧侶を育成する修行道場です。日々どのような修行が行われているのか、広報主任の篠崎英治さんにお話を伺いました。

「善寶寺は2時間ごとにご祈祷がありますので、修行僧はその合間に坐禅や作務、講義などの日課をこなします。当寺は少人数での修行ですので、さまざまな仕事を経験することができます。ですから下山してすぐ法要などに対応できる点は、当寺の特徴かもしれません」。

修行者が入山するとまず5日間の坐禅期間があり、それを終えてはじめて一員として迎えられ、坐禅堂に入ることが許されます。そこで与えられた1人1畳が生活の場です。さらにそこから百日禁足、外出や外部との連絡を一切断ちます。その間に多くの仕事や作法を覚え、禁足が解けると法要儀礼などの振る舞いを教わります。あとはひたすら日課に勤しむ毎日です。現在、修行に励んでいる山本晃平さんは、将来自坊を継ぐため、今春入山しました。「修行を始めて間もない頃、単頭老師に『威儀即仏法（いぎそくぶっぽう）』の教えを受けました。それ以来、作法や身だしなみにとても気を遣うようになりました」。「威儀即仏法 作法是宗旨（さほうこれしゅうし）」とは、日常生活の立ち居振る舞いがそのまま、仏様の教えであるということ。山本さんは道元禅師のこの言葉を心のよりどころにしてきました。「食事も掃除も、坐禅をすることも『生きることそのものが修行』で、仏様の心につながっているんだと。けっして修行の間だけではなく、生きている限り一生続いていくものだと心得ています」。「行いを修める」と書く修行、篠崎さんは修行をする意味をこう話してくれました。「坐禅だけではなく、合掌一つ、箸の上げ下ろし一つが仏の姿になるよう修行する。これは『形の中に身を任せる』ということです。修行者はあらゆる欲を自分から離して、体を形に任せていく。そして人々は、『願い』という執着を手放して神仏に任せる、それが祈りです。お坊さんが祈る姿は神仏に任せている姿ですから、人々は僧を通して心を神仏に任せる、その行いがご祈祷なんですね」。「信」という字には任せるという意味があるといわれます。「信仰」はキリスト教のような大いなる神に対し「仰いで任せる」こと。一方で、日本人が抱く「信心」は「心に任せる」こと。坐禅に始まり坐禅に終わる修行は、自分の心に常に問いかけ行動する「即心是仏」心がそのまま仏であるという生き方を示してくれています。



修行僧の一日

5:00　起床
5:10　坐禅
5:30　一番祈祷
6:20　朝のおつとめ
7:00　朝食
8:00　ご祈祷
　　掃除
10:00　ご祈祷
10:20　昼のおつとめ
11:00　昼食
12:00　ご祈祷
　　休憩
14:00　ご祈祷
　　講義（1時間）
15:30　晩のおつとめ
16:00　ご祈祷
17:00　夕食
19:00　坐禅
21:00　開枕（開被案枕）

山本晃平さんは寒河江市の「壽福寺」の長男で、現在21歳。大学を1年間休学し、今年3月から修行に励む。「修行僧が少人数なので短期間でさまざまな経験ができること」が善寶寺の修行の特色。

1日の始まりと終わりに、坐禅をすることで心身を調和させる。

講義は書道や仏教解説、法話など。

食事は基本、一汁一菜と質素。

食事は音を立てずに、感謝を以て。

朝昼夕に合掌する日常のおつとめ。

大般若経転読のご祈祷は大迫力。

掃除などの作務も大切な修行。

6

7

8

5

2

1

4

3

1200年の信仰の歴史を紡いできた6万坪の善寶寺では歴代の名匠たちの技が至るところで訪れる人を迎えています。荘厳なる仏教美術の世界へ、いざ歩まん。

善寶寺 美術探訪

境内に足を踏み入れ、最初にくぐる「総門」は安政3（1856）年の再建です。棟梁の劒持嘉右衛門は鶴岡市温海地区に生まれ、江戸や京都で大工・仏師・絵師として腕を磨いた後、30代で善寶寺に招かれました。以来48年にわたって数々の建造物と彫刻を手がけ、総門と同じく棟梁を務めた「山門」には、弟・奥山富五郎と競い合って作った見事な獅子の彫刻が残されています。

山門の左手にある「五重塔」は、明治26（1893）年に名匠・高橋兼吉らを棟梁に、海の生き物の供養塔として建立されたもの。大日如来を表す芯柱が塔中央に分銅のように吊るされており、それが免震構造となって今まで数々の大地震から塔を守ってきたといわれています。

山門右手の「五百羅漢堂」にある531体もの仏像は、一つとして同じものがなく、「亡き人の面影しのぶ五百羅漢」と詠われるように、写真のない時代には人々が故人に似た顔を見つけて手を合わせてきました。今は東北芸術工科大学による現状維持修復作業が進められています。

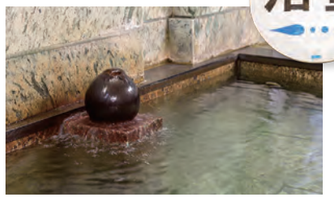
さらに石段を登って本堂の奥に向かうと龍神様を祀る「龍王殿」が。竜宮城を模した建物は、内外ともに華やかで荘厳な姿を示しています。

他にも境内には劒持筆「雲龍図」がある「龍華庵」や、国の重要文化財に指定されている菱田春草筆「王昭君図」、岡吉枝画伯親子による「龍頭観世音菩薩」などもあり、日本人の信仰と芸術性を体感することができます。雪が解ける頃、心整える美の散策にぜひお出かけください。

1 龍王殿（登録有形文化財）の天井絵。
2 右に毘沙門天、左に韋駄天が門を護る山門（登録有形文化財）。2階楼上内部には秘仏・十六羅漢が安置されている。
3〜4 五百羅漢堂（登録有形文化財）の内部。
5 総ケヤキ造、高さ38メートルの五重塔。仏の5つの智慧を表す五智如来が祀られている。
6〜8 十二支を主体とする細やかな彫刻が並ぶ総門（登録有形文化財）。

特集
善寶寺、
祈りの365日

浴室



お泊まりの場合

お寺に宿泊し、午後4時祈祷と朝一番祈祷を受けることができます。夕食・朝食・ご祈祷札がついてお一人様10000円（小学生以下5000円）。写真は浴室と宿泊室（一例）です。要予約。

坐禅会のご案内

●禅のつどい（毎月第4土曜日）
初心者におすすめの坐禅会。ヨガ講師の上野昌代さんによる寺ヨガとセットの時もあります。

●禅のつどいネクスト（毎月1回）
中級者向け。禅のつどいより長めの坐禅会です。

●土曜参禅会（毎月第2土曜日）
上級者向け。坐禅堂にて50分の坐禅を2回行います。

《申し込み・問い合わせ》
☎0235-33-3303

龍神堂の奥にあるお水取り浄域のお地蔵さま

お札受け取り

ご祈祷が終わったら正面に「奉勧請」と書いてあるお札を受け取ります。このお札は龍神様の御尊体。家に帰ったら神棚や部屋の高いところにお祀りし、お水を献じてください。

貝喰の池には今も人面魚が！

おみやげ

御守札授与所の売店では、善寶寺らしく大漁旗をはじめ各種お守りを販売しています。ご家族や友人へのおみやげにもぴったりです。

よろしかったらお食事どうですか？

ご祈祷を申し込むとお一人様ご祈祷料5000円以上で、ご希望の方は精進料理をいただくことができます。写真は5000円のご祈祷につく精進料理。評判高い善寶寺の味覚をこの機会にぜひ。

始まるまで待ちます

申し込みが済んだら待合室に移動してご祈祷開始の案内まで待ちます。早めに着いたら、広い寺内の8カ所にある「蛇紋石めぐり」もおすすめ。
※蛇紋石めぐりは期間限定

受　付

石段を登り、本堂右側の御守札授与所から中に入り、申し込みをします。ご祈祷料は3000円から。開始時間20分前までに受付を済ませてください。

境内に入ったら龍神様の手水舎でお清めしましょう

ご祈祷時間

早朝　5時30分（事前予約）
午前　8時（当日可）
午前10時（当日可）
正午12時（当日可）
午後　2時（当日可）
午後　4時（当日可）

ご祈祷に行こう

善寶寺では、毎日誰でもご祈祷を受けることができます。
1回の所要時間は20〜30分。
龍神様のご加護が届きますように。

ご祈祷

案内があったら本堂に移動して着席します。600巻の大般若経を僧侶たちが一斉に転読するご祈祷に身を委ね、神仏とのご縁を結びます。

本堂に向かう石段でお地蔵様を発見！探してみてね

庄内写真季行 34

酒田市・鳥海山

鳥海山の雪の白さを際立たせるヒシクイの群れが、庄内平野の空を大きく舞う。

冬を迎えると大型のガンの一種、ヒシクイの群れが庄内平野に訪れ、雪に覆われた田んぼでの生活が始まる。２月、ぼくは雪田に点在する群れの集団を観察しに出かけた。雪をおこし、落ち穂や草を啄むもの、羽を休めるもの、畦を越して歩き始めるものなど、多彩な表情が見て取れる。グワングワン賑やかな鳴き声も聞こえてくる。冬の厳しいこの季節、庄内平野は冬鳥の楽園となり、いきものの密度がひときわ濃くなる。自然の豊かさの証だろう。

写真・文＝斎藤 政広

0.1秒を競う競技スキーヤーや
スノーボーダーなど妥協を許さない人たちから
絶大な支持を受けているモノがある
山形県鶴岡市羽黒町産のワックスだ

ハヤシワックスの スキー・スノボ用ワックス

「すべてのSNOWファンへ」とのコンセプトのもと、ハヤシワックス代表の林真子（まさこ）さんがワックスづくりを始めたのは、専業主婦だった12年前。子ども3人を連れて蔵王へスキーに行った時、市販のワックスを塗っても滑らないという苦い体験をしたこと、そして競技スキーに励む子どもを持つ友人から「大会で勝敗の鍵を握るのは高額な高性能ワックスを購入できるかどうかだ」と聞いたことがきっかけとなった。〝家庭の経済力なんかに左右されず、子どもたちには同じスタートラインに立ってほしい〟その思いが林さんを動かした。

独学で有機化合物について勉強し、自宅の台所でワックスづくりに勤しみ、できたベースワックスを破格値で直売した。同時に滑りをさらに高めるためのトップワックスづくりにも取り組み、苦労の末にあらゆる種類の添加剤を手に入れて、全国各地のプレイヤーの協力のもと、何度もテスト滑走をしてもらった。そうして生まれたトップワックスはあっという間に口コミで広まり、全国から注文の電話が鳴り止まなくなった。子どものためにと作り始めたワックスが、プロも含む「すべてのSNOWファン」へ届いたのである。

その後、ワックスの種類は雪温や用途に合わせて増え、ホットアイロン不要の簡易ワックスや液体ワックスも開発。近年開発に成功したリキッドワックスは、驚くほど手軽であるにもかかわらず、プロ仕様の仕上がりとなるため、発売当初から評判を呼び、アメリカをはじめ海外からのオファーも続いているという。今や、日本だけでなく世界のSNOWファンが待ち焦がれているのだ。

右ページの商品はアイロンを使って塗るベースワックス。雪温に合わせて3種ある。左の写真は右から、近年開発したリキッドワックス、山形県のスキー場のみで販売している簡易版の「山形県民ワックス」、環境に配慮した「BIends」シリーズ。現在は製造販売を真子さんとご主人と息子さんの3名で行っている。詳細は公式サイト https://hayashiwax.jp/にて。
ハヤシワックス 0235-62-4179

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

小春日の山王くらぶを訪ねる

雪催(もよ)いの日が続くと
小春日は貴重な一日となる。
鳥海山の白い頂きに映える茜色が
仄々(ほのぼの)と心に沁みわたる。

季語
小春日(こはるび)
立冬を過ぎたあとの春のように良く晴れた暖かい日。またその日差し。

傘福

江戸時代に北前船の往来により上方との交易の拠点となった湊町酒田では、多くの豪商が富をなし、茶道や生け花、俳諧などとともに料亭文化が広まった。明治28年に開業した「宇八楼」は戦後間もなく「山王くらぶ」となり賑わった。平成15年には国の登録有形文化財に指定され、今は観光施設として人々を迎えている。隠れ蓑の実が青空に映え、雪をまだ知らぬ雪吊りの縄の香をまとっていた。

雪吊のひと本に残しおく

—水内慶太

一つ一つ部屋を巡ると、意匠を施した組子建具などには、繊細な美の中に豪商たちの洗練された文化を見ることができる。小さな茶室から覗く坪庭の紅葉は、散る直前に鮮やかさを増して木に尽くしていた。竹久夢二はここを気に入り、何度も訪れたという。土蔵の壁の明かり取りから、小春日のやわらかな光が薄暗い部屋に一筋の光を招き込んでいた。地袋の引違戸に描かれた絵に目がとまる。「誰(た)が袖の間」ともいわれるこの部屋で、どのようなおもてなしがあったのだろう。

小春日や忘れかけたる人の事

—竹久夢二

2階に上がると見事な折上格天井の広い部屋に、人形作家辻村寿三郎の「さかたの雛遊び」と「舞妓」作品が鎮座している。かつてこの大広間では、結婚式もあげられていたという。厳かな雰囲気の大広間から、2階の一角の部屋にすすむと、一転、華やかで温かい空気に包まれる。部屋中に色鮮やかな幾つもの傘福が飾られている。傘福は、江戸時代後期から、家族の幸せや子どもの成長を願い作った飾りを傘につるし、神社仏閣に奉納された。現在は福岡柳川のさげもん、伊豆稲取の雛のつるし飾りとともに、日本三大つるし飾りに数えられている。

宝袋を縫う手

階上の子も物書くか夜の落葉

—上田五千石

窓辺の日差しが入る机で、一つ一つ丁寧に布地を縫い合わせる手には歴史が刻まれていた。つるしには、宝袋や瓢箪(ひょうたん)などの「宝づくし」と呼ばれる湊町酒田ならではのものもある。1階の廊下の突き当たりには、本間家三代当主光丘が酒田のまちを活性化しようと京都の人形師に作らせた「亀笠鉾」の絵が飾られていた。

手のひらにのせる小春や湊町

—あべ小萩

酒田では、傘福に祈りを込めてきた希有な文化の保存伝承に、酒田商工会議所女性会などが取り組んでいる。お雛さまの頃になると2階の大広間には多くのつるし雛が飾られ、さらに艶やかさを増す。往時の料亭の優れた建築様式に触れながら、時代を超えても変わらぬ女たちの祈りに思いを馳せた。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）

◆山王くらぶ 酒田市日吉町2-2-25

寺社めぐりの間

夢二の間

隠れ蓑